

平成10年10月  
全国病児保育協議会  
広報委員会

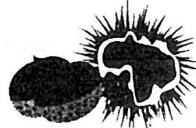
# 病児保育協議会ニュース



## 第7回 全国病児保育協議会 研修会への参加を

平成10年11月15日(日) 9時~

川崎市医師会館(川崎市)



### 研修委員長からのメッセージ

11月15日(日)の研修会につきましては、先日多くの施設よりアンケートにお答えいただきました。今回は、アンケートを職種別にお願いしましたが、職種別に知りたいこと、困っていることがないか調べることによって、それぞれの施設の「病児保育の質の向上」につながるようにしたいと思ったからです。その結果に基づき、今回の研修会の分科会は、職種別に分かれるようテーマを考えました。もちろん分科会の参加は職種別に限っていませんので、どの分科会に参加されても構いません。せっかく来ていただくのですから、何らかの成果をご自分の施設を持って帰っていただき、今後の運営に役立てていただきたいと思います。

また、参加の申し込みの時に、講演や分科会で質問したいことなどを記入していただく欄を設けます。講演の中や分科会の中で、または後日、協議会ニュースにとりあげていただくなど何らかの形でお返事したいと思っています。どしどし記入いただきますよう、お願ひいたします。

前日の14日(土)は、研修会実行委員長の池田先生のご尽力により、川崎市医師会によるレセプション“Welcome To Kawasaki”が、日航ホテルで行われます。懇親を深める少ない機会です。多くの方々の参加を心待ちにしています。

向田 隆通

### 教育講演講師

#### 「上野美代子先生」を紹介します！

自治医科大学付属病院

小児科病棟保母 中村崇江

今回の研修会で教育講演をなさる、自治医科大学看護短期大学小児看護学研究室、助教授の上野美代子先生を紹介します。先生は小児看護に携わる私たちの良き母であり、入院中の子ども達のおばあちゃん(?)であり、何といっても遊びの達人です。

ある日の小児科病棟での遊びの時間、子ども達と歌遊びをしていると「体が誘われちゃうのよね」と踊りながらプレイルームに入って来るので、「みんな、体が動いてないわね」と先生自らリズムをとって踊りだし、子ども達とのサンバ大会のはじまりはじまりでした。それだけではありません。プレイルームに行くのだって遊びです。子ども達の大好きなアンパンマン号に乗り、右へ左へとくねくね曲がり、金魚の水槽を経由しての到着です。トイレに行くのだって(行きは急いで行かなければ漏れちゃうので、帰りに)「だるまさんがころんだ」をしながら・・・などと、何から何まで遊びに変えていくのでした。

病気になったら静かにして(でも、子ども達はよほど具合が悪くない限りはパワー全開)、遊ぶんだったらゲ

ームやお絵描き、絵本に製作・・・となりがちな入院生活なんてつまらない！！と言いだした病棟一のガキ大将(実は保母である私)とその仲間(子ども達)の声に応えて、幼稚園や保育園などでふだんしている元気な子どもの遊びを病棟用にうまくアレンジしたり、入院中の子ども達の遊びにひと味加えて出来上がったのが「入院児の遊びと看護(医学書院)」の本です。この本の正しい使い方・・・それは遊びを子ども達と一緒にする「あなた」が楽しくなければなりません。

先日、上野先生のお嬢さん愛用のジェニーちゃんセットを病棟でいただきました。大喜びの女の子達。ジェニーちゃんがいなかつたので、自分達の縫いぐるみや人形、しまいには子ども達がジェニーちゃんになり、毎日飽きることなく遊んでいます。いつもの決まったおもちゃや遊びだけでなく、目先を変えてこんな遊びもたまにはいいなと思うこの頃です。

#### 編集部より

今年の職員研修会で教育講演「病児と遊び」をしてくださる上野美代子先生をよくご存じの小児科病棟の保母さんに上野先生の紹介記事を書いていただきました。

(研修会プログラムは最終ページ参照)

## 関連学会レポート

## 第45回日本小児保健学会

特

集

**病児保育 関連演題の報告**

去る10月1日(木)2日(金)の2日間、東京の明治記念館において東京慈恵会医科大学小児科学講座前川喜平教授を会頭として、第45回日本小児保健学会が開催されました。その際、病児保育関連で発表された3つの演題をご報告します。

## 1. 「病後児保育運営上の問題と

## 対策～当施設での試み～」

八柱乳幼児健康支援デイサービス ひよこ保育園  
中野三代子他

## 〔開設後9か月の運営と利用状況〕

ひよこ保育園の利用は保護者の希望が最優先であり、特定の医療機関の診察を必要としない。入室時、保護者にかかりつけ医から受けた診断と指示を病状連絡票に記入してもらい、保育者はそれに合わせた保育を提供する。保育園の定員は4名、保母は2名、病後児保育室として1日2回の看護婦の巡回、必要に応じて当施設併設病院小児科医の回診、病院栄養課による昼食とおやつの提供が行われている。また、感染性の強い疾患については隔離室を設けて対応している。97年7月から98年3月までのひよこ保育園の利用者数は90名(延べ403名)で、月ごとの利用状況は、併設病院小児科外来患者数の増減とほぼ同様に変動しており、特に冬期の利用者数が増加していた。

## 〔運営上の問題点〕

開設から9か月経過し次のような事項が問題点としてあげられた。

- 1) 延べ利用者数403名のうち、保育中に38.5℃以上の発熱を認めた者は54名(13.4%)であり、発熱、喘鳴など症状の変化により、保護者連絡のうえ、かかりつけ医または併設医療機関に再診した者は29名(7.2%)であった。病後児といつても様々な疾患があり、病気の回復状態にも幅がある。また、保護者によっては病気回復期の家庭生活の過ごし方、予防接種について等の医学的な知識が要求される質問をする方もあり、担当する保母に病気に対する専門的な知識が必要と考えられた。
- 2) 地域における疾患の流行りと利用状況は、ほぼ同様の変動が見られるが、利用者数を予測することは難しく、日によって利用者数の変動が大きく、当日キャンセルの割合も22%と高かった。更に隔離室を利用する感染症患儿の利用を予測することは困難であり、スタッフの配置が当日にならないと決められず、過不足のバランスをとるのが難しかった。
- 3) 隔離室を利用する疾患は平均3日と利用日数が長く、他の隔離室利用を必要とする感染症児を預かることができなかつた。

## 〔対策〕

併設病院の協力を得て、ハードとソフトの両面から改善を試みた。

## 1) 保母の研修システムの改善

当院小児科外来クラークを保母業務の一環としてローテーションし、病気に対する基本的知識と介護について小児科医や看護婦から直接指導してもらえるようにした。研修内容は、小児保健、小児の疾患、薬、ミルク・食事の内容と与え方、事故防止と安全対策、感染防止についてである。

## 2) ミーティングの強化

保母間で病児の不安や甘えに対する対応、疾患の種類や安静度、年齢や発達の異なる児と一緒に保育する際の工夫、安静度に応じた遊びなどを提案しあい、毎日保育終了後にミーティングの場を設け、保育に生かすこととした。

## 3) データベースの作成

当日利用する子どもの情報を迅速かつ的確に得るために、データベースを作り、予約の時点で住所やかかりつけ医、緊急連絡先、既往歴や予防接種歴、アレルギーの有無などが検索できるようにした。

## 4) スタッフの増員

スタッフの過不足を調整するため保母の人員を増やし、保母の勤務をひよこ保育園、小児科外来クラーク、院内保育室(職員の子どもが対象)の3箇所にし、状況に応じてバランスよく配置できるようにした。

## 5) 隔離室の増室

予備の部屋を確保し、感染症が重なった場合にも対応できるようにした。

まとめ 98年4月より実施されたこの運営方法は、医療機関併設型における利点を生かした方法と考えられ、今後、問題点を改善できたかについて検討していきたいとしている。

## 2. 「乳幼児健康支援・デイサービス

## 事業に関する全国調査結果

日本小児科医会調査委員会 石川作男他

この報告は、日本小児科医会の調査委員会が行った乳幼児健康支援・デイサービス事業に関する調査です。以下にその概要を紹介します。

1996年4月から6月末までの3か月間に日本小児科医会会員、保育所入所児の保護者、全国の保育行政及び小児保育関係者の3グループを対象にアンケート調査を実施。回答総数は各々1,705人、5,325人、3,163人、総計10,193人。アンケート協力者の年齢は、小児科医会会員は60~69歳(27.1%) 40~49歳(25.0%)が最も多く、保護者では30~39歳(66.5%)、保育関係者では40~49歳

(38.3%) が最も多かった。また、「病(後)児保育又は病(後)児デイケアないし病(後)児デイサービスという言葉を知っていますか」という設問には、小児科医会会員 83.0%、保護者 31.8%、保育関係者 82.3%が「はい」と回答しており、保護者の認識度が著明に低い結果となっていた。

### 〔考察及びまとめ〕

子どもの病気は、就労している母親にとって不可避な「突発事故」であり、その救済制度に寄せられる期待は大きい。今回の保護者調査で、93.2%が病(後)児保育を必要とする結果を得た。これに対応する小児科医会会員調査では「当然或いは現実に必要な制度」としたものが 89.7%であり、内容的には開業医より病院、大学勤務医が僅差で上回っていた。年齢的に観察しても、50 歳以下の方が 60 歳以上よりもやや高値を示し、若い会員の意欲が感じられた。また、行政、保育所調査では、行政 90.2%、保育所 86.2% が必要としていた。開設する場所として、保育関係者及び小児科医会会員は「小児科施設を利用する」が多かった(44%・52%)。これは緊急事態の発生を考慮にいれての結果と思われる。保護者の方では上記に比べ「現在利用している保育施設」が 70.3%と圧倒的に多かったが、これは気心が知れた所で看護してもらおうとする母親の本音かも知れない。「対象年齢」では小児科医会会員は 3 か月・6 か月・1 歳以上を略平均的に選んでいるのに対して、保育関係者は 1 歳以上を選び慎重性をうかがわせた。「病気の種類」でも保育関係者は「回復期」が最も多く、小児科医会会員はそれに加えて「出席停止」の感染症まで挙げ積極性がみられた。保護者は「対象年齢」で 1 歳以上が多いものの、3 か月以上も多く、また、求めるサービスとしては、「症状変化時の医師への受診」を筆頭に「園での与薬」などを望んでいる。

病(後)児保育の実施状況は極めて少なく、現状ではエンゼルプランの先が見えません。国に対して高齢者対策にのみ目を向けることなく、小児医療・デイサービス事業への積極的な対応を望みたいと思う。

## 3. 「子育て支援をめぐる諸問題の検討

### 一保育者の意識の分析を通して一

聖徳大学短期大学部 阿部 和子 他

この報告は、子育て支援のあり方、特にセンター的な役割が期待されている保育所における支援のあり方を検討することを目的とする一連の報告で、今回は支援を担う保育者の意識を分析することを通して、受け入れ側の現状と課題を整理することを目的としたものです。子育て支援策として「延長保育」「休日保育」「病児保育」「産休明け保育」のそれぞれについて保育者の意識調査を行っていますので、「病児保育」についてのみここでは紹介します。

**調査対象**は、千葉県の M 市と K 市の公立保育園保育者で、調査は 98 年 2 月下旬から 3 月上旬に行い、有効回答数は 365 (回収率 77.5%)。回答者の年齢は 20 歳代から 50 歳代後半まで、35 歳から 44 歳までが 44% を占めていた。

#### 〔病児保育について〕

病児保育については 17% の保育者が「賛成」しているが条件つきである。病気の時などは本当は母親の側が一

番いいし、また現状では病児保育をするのには不備であるので、看護婦の常駐や医師や病院との連携、病児保育室の整備が必要であるとしている。また、受け入れるとして、病気の程度や種類に制限が必要であり、例えば、病後児や軽い風邪、少しの熱、伝染病の回復期などをあげている。

一方、「どちらともいえない」と回答した 45% についてその理由をみてみると、賛成とほぼ同じ意見である。賛成になつたりどちらともいえないになつたりと、母親の気持ちと子どもの気持ちとの現実の狭間で微妙に揺れ動いている保育者の姿が浮かび上がる。残り 40% 弱の反対意見は「いつも離れているのだから不安定になりやすい病気の時ぐらいはゆっくりと側にいてあげるべき」が多く、次に人的的な条件不足、保育者側の問題として病気に対する知識不足、責任の問題をあげている。

また、「考えられる子どもや保護者の気がかりさ」では保育者は子どもには 70%、保護者には 80% が「気がかり」と回答しており、この結果を受けて、保育者の意識の矛盾について示唆している。保育者の子育て支援に対する意識と現実に感じている親子に対する意識のズレをきちんと認識して、この気がかりな親子を受入れながら、子どもの発達にとって、また働く親にとっての保育所の役割を検討しなければ真の子育て支援のあり方は見えてこない。

### 筆者のコメント



八柱乳幼児健康支援デイサービスひよこ保育園は、東京のベッドタウンである人口 46 万人の松戸市に、千葉県としては 2 箇所めの病後児保育室として、昨年 7 月に開設されました。開設後 9 カ月間の経過と、運営上の問題やその対策についての報告です。スタートしてから 9 か月間で問題を整理し、かつ併設の医療機関の協力を得ながら問題への対策を検討していくというより質の高い「病児保育」を求めていく姿勢や方法には、学ぶものが多くあると思います。

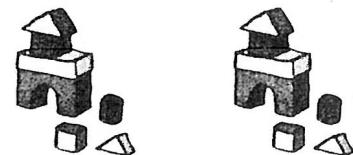
また、日本小児科医会調査委員会の報告では、近年における病児保育に対する必要性が明確となり、同時に保護者に対する病児保育協議会の積極的な広報活動の必要性が示唆されました。日本小児科医会の調査委員会の報告冊子に「もし、自由に勤務を休むことができるならば、子どもの病気の時には自分たちで面倒をみたいと思いますか」という保護者に対する設問で、94.4% の保護者が「はい」と答えています。この保護者の気持ちを十分に受けとめ、より質の高い病児保育室を目指したいと思います。

聖徳大学短期大学部の報告からは、保育所において病児保育を行うことに対する保育者の意識調査で、反対が 45% と高く賛成は 17% しかありませんでしたが、子育て家庭の現状を勘案すると、整備を整えるための環境を整えた病児保育を行うことには、保育者としても、過半数を越えての賛成となります。病気や看病の知識のない家庭が増えてきた昨今の実態を認識すれば、さらに賛成が増えると予測されます。病児保育室の活動の 1 つに「家庭看護講座」等を広げていくことが、真の子育て支援になることも示唆されているように思えてなりません。

(淑徳短期大学講師 帆足 晃子)



## 病児保育室訪問



### エンゼル多摩

エンゼル多摩は、事業主体である川崎市が川崎市医師会に委託し、医師会が川崎市医師会保育園医部会に運営委託した県内唯一の病児保育室です。

対象児童は、川崎市内在住で保育園等に通園している生後43日から未就学までの事前登録児(当日登録可。登録料無料)で、平成10年9月末現在実登録児は約1,600名となっています。定員は12名で、隔離室2室と安静室、保育室があり、2名の看護婦と4名の保母が看護保育に当たっています。また、前述の保育園医部会員5名が、それぞれの担当曜日を回診にみえます。

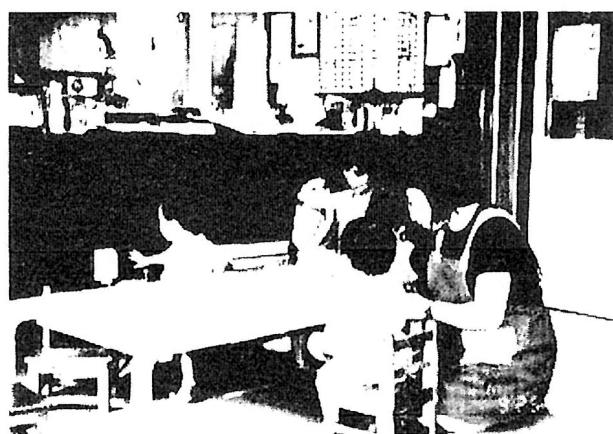
利用に当たっては、電話予約の上、各児童の「かかりつけ医」から発行してもらった主治医指示書を持参します。利用時間は平日の午前8時から午後6時まで、土曜日は翌週分の電話予約のみ受け付けます。アレルギー除去食、食事療法などの他、午前中の病状変化にも対応できる完全給食を実施し、利用料金は食費・おやつ・その他すべてを含んで一日2,000円です。開所から2年半を経て、延べ利用者は約5,800名となりました。今後とも地域の子ども達のためにより良い保育を目指したいと思っております。

研修会前日の見学をご希望の方は、行政担当者、新規開設希望の方、遠方よりお越しの方を優先的に、12:30~14:00の間でお受けできる範囲でお受けしたいと思っております。エンゼル多摩施設長代理まで

早めにご連絡下さい。

#### 施設紹介

代表者名 川崎市医師会保育園医部会会長 池田 宏  
住所 〒214-0012 川崎市多摩区中野島 3-15-10  
連絡先 電話・FAX 044-922-8724  
開設日 平成8年2月1日  
定員 12名  
対象年齢 生後43日目から未就学まで  
職員数 施設長(1)、嘱託医(1日、延5)  
看護婦(2日、延3)、保母(4日、延7)  
調理員(1日、延2)、用務員(1)  
事務員(1)、朝夕学生アルバイト



### レインボールーム

広報活動については、施設開設前に玉名市(福祉課)と市内保育園との3者で話し合いの場を持ちました。保育園では病児保育施設を歓迎してくれましたし、市内児童の登録の取りまとめ役を引き受けていただきました。

保護者へも施設の案内を積極的に勧めています。こちらからは、月に1回病気に関する情報(レインボー便り)を、各保育園宛にお知らせしています。園ではその情報を利用して、保護者へ注意を促しているようです。施設紹介のパンフレットも作成し、各施設(保育園や病院)へ配布しました。施



設に見学に見えた方々へも渡しています。玉名市では広報誌を活用して一般の方へ案内しています。

また、利用時間に幅をもたせるため、午前、午後、1日の3つに分け、料金を設定しました。保護者の方々も都合に応じて利用されています。

施設内はガラス張りという利点を活かし、明るくかわいく楽しい飾りつけにして、子どもたちが少しでも元気でいられる部屋にしています。(外から見てもかわいいです。)お迎え時には、保護者(母親)の相談窓口の役割を果たしています。育児だけでなく様々なことを話してほっとしてお帰りになる方が多いようです。保護者の安心なさった表情と「助かりました」という言葉が、私たちの励みになっています。

施設開設当初は、スタッフが施設長についていくばかりでした。最近ではスタッフが、施設長をリードしているというのが、レインボールームの特徴(?)となっています。

#### 施設紹介

代表者名……………前田利為  
住 所・連絡先………〒865-0061熊本県玉名市立願寺151-3  
Tel/Fax 0968-72-4770  
開 設 日……………1997年4月1日  
定 員……………5人  
対 象 年 齢………0歳から就学前児童  
職 員 数……………看護婦(主任)1名、保母1名、児童指導員1名・事務兼1名、栄養士

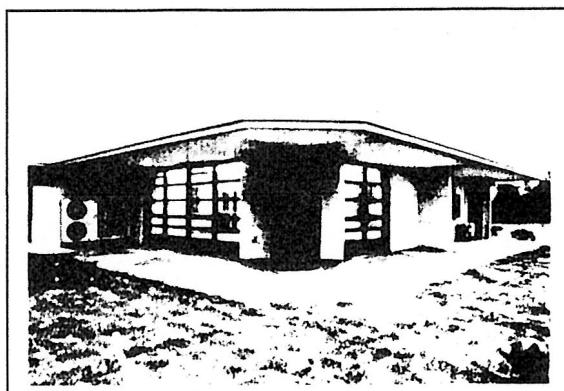
# 病児保育室日誌

## KIDS LAND

清心乳児園 子育て支援センター  
看護婦 小林清美

平成9年4月清心乳児園に子育て支援センターが併設され、現代社会の地域ニーズに応えるべく子育て支援事業の整備に取りかかりました。従来からのデイ・ナイトケアに加えて、今年度より「子育て講座」の開設や「病児デイケア」の登録を開始しました。病児デイケアは、

「乳幼児健康支援一時預かり事業」として町との委託契約（単独事業）が成立し、町の広報誌による紹介を行い、徐々に登録数も増えはじめた9月4日、はじめての病児を迎えるました。病児第1号は、5歳と2歳の兄弟で、感冒・扁桃腺炎による発熱が持続しているための利用です。母親は3人の乳幼児を抱えて就労しており、就職が決まった時点で、「もしもの時のために・・・」と事前登録をされていました。午前8時20分、母親と共に入室。子どもの様子を伺い、後追いする弟の手を引いて母親を見送って、いよいよ病児保育の始まりです。兄は体温が38.4°Cと上昇し、機嫌はよいのですが、ときどき軽く腹痛を訴えます。弟は、昨夜解熱剤で下熱した後は発熱はみられないものの、トイレに何度も促しても「いや、いや」と言って排尿はありませんし、パンツにも漏れません。食事は、食べられるものを少量づつ与え、水分補



給に努めました。子ども達も、はじめての場所・はじめての大人相手に、尿も出ないほどに緊張しているのだろうかと思いながら、また職員もはじめての病児ということもあり、子どもの状態の把握に神経を集中させて、出来るだけ良い環境の提供にと気を配りながらの保育でした。17時30分、母親が急ぎ足で迎えに来られ、一日の様子を説明して母親と手をつないで帰る子ども達を見送ると、一日の緊張もほぐれ、内心ほっとして病児保育の一日が終わりました。病気の子どもを預かるという責任の重大さを再認識するとともに、子育てと就労の両立支援として確かな手応えを感じることができ、今後も病児保育内容の充実のために、より一層努力をしていきたいと思います。

### シンボルマーク決定！！



シンボルマークへの応募ありがとうございました。全部で13点の力作が応募されました。常任協議員等の厳正な投票により、第1位となったのが、この作品です。これはレインボールームの応募作品で、このイメージは、親と子と一緒に社会みんなで支えることにおいているとのことでした。親しまれるシンボルマークとしてご愛用ください。

### 来年度概算要求

#### 病児保育室は350施設へ

来年度の国の予算に対する厚生省の概算要求では、乳幼児健康支援一時預かり事業は350施設に！しかし財政危機のなかで楽観は禁物

### 「ある遊びの風景より」

枚方病児保育室  
看護婦 堀田 和子

8月も後半に入ったある日、ぞうの部屋に、とびひと感冒の子ども達が入室しました。1歳7か月の〇〇くんは、とびひの薬を見ただけで気配を感じて大泣きするのです。日毎に泣き声は小さくなってはいるものの2人がかりで処置をしないと出来ないとです。そんな〇〇くんですから、遊ぶときも自分の思うようにならないと結構大きな声で泣きだします。

下の写真のときも、他のお友だちが紙芝居をしようと出してきて、保母に読んでもらっているのですが、〇〇くんはマイペース、他のスペースでおもちゃをもって動き回っています。これは、ある日の風景ですが、子ども達が病気の時でも、出来るだけ不安が少なく、楽しく（心地よく）過ごせるように、好きなおもちゃや遊びを知って、遊びがバラバラになってしまっても、どちらも保障するような、いろいろな配慮や工夫が必要だと思います。



## 手作りおもちゃ

泊江すこやか病児保育室

### フェルト玩具

当保育室でも、病気のお子さまが家庭的な雰囲気の中リラックスして過ごせるよう、市販のおもちゃの他に手作りの玩具を用意しています。中でも人気のあるのが、フェルト製の野菜や果物、お魚やハンバーグなどで、おままごと遊びやお店屋さんごっこを盛り上げてくれる大切なおもちゃになっています。

#### 〔事例1：4歳児Aちゃん・Mちゃん、3歳児Tくん〕

Aちゃん・Tくんは感冒兼咽頭炎、Mちゃんは喘息様気管支炎で3人もお熱は微熱程度。入室してすぐ意気投合し、レストランごっこを始めました。交替でお客さま役になり、リクエストに沿ってお皿の上に焼魚、プリン、フライドチキンなど彩りよく並べてお給仕したり、仕出し屋さんのようにお弁当箱にさまざまなおかずを詰めてみたりと、工夫いっぱいでお遊びできました。布の温もりが子ども達には本当に心地良いようです。スナップでケーキと苺をくっつけられたり、マジックテープで繋げられる物もあるので、子ども達の想像力でお遊びが広がるのも人気の秘密かもしれません。



#### 〔事例2：1歳児Sくん〕

水痘5日目でかさぶたの周囲がやや赤く、お熱はないもののまだ他のお子さまと同室保育ができなかったので、隔離室で保母と1対1でお遊びしました。Sくんとフェルトのトマト、キュウリ、大根などで「ちょうどいな」「どうぞ」「にんじんさん、くださいな」「はあい」など言葉のやりとりを楽しんだり、食べる真似っこをしたりしました。Sくんはつい本当にお口に入れてしまったり、ブンブンと放り投げたりすることもありましたが、布製なので危険もなく、ご機嫌でお遊びができました。日頃、日光消毒をはじめオスバン液で拭くなど、安全と衛生面に十分配慮しています。これからもお子さんに愛される玩具作りを心掛けたいと思います。

協議会ニュース 編集事務局  
〒180-0003 武藏野市吉祥寺南町1の19の2  
帆足 晓子 宛  
FAX 0422-49-9752  
E-mail ehoashi@parkcity.ne.jp

## 紙芝居

病児保育では室内遊びが中心になり、絵本や紙芝居を読む時間も多いのですが、ここでも市販の物ばかりではなく、オリジナルのお話も楽しんでほしいというスタッフの思いから、当保育室では手作り紙芝居を何作か作っています。

### 「ふゆのお化け」

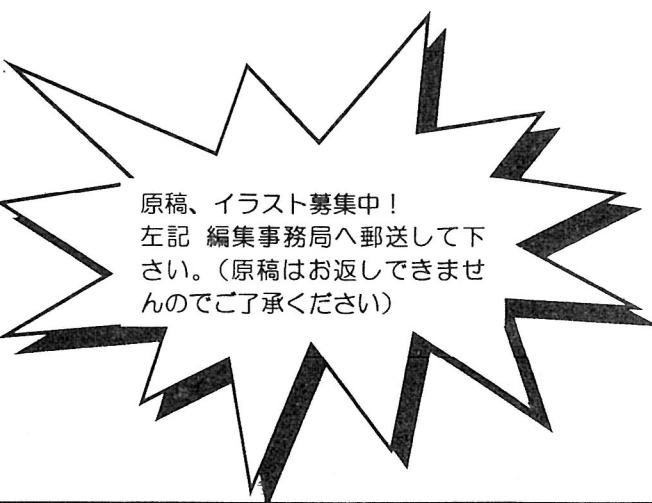
春を待ちきれない男の子が自分で春を探しに行き、冬のお化けに出会い、そりすべりやかまくらで一緒に遊びます。実はお化け達は春を運ぶ役目をしていたのです。4歳児Iちゃんは、お化けが変身する時のおまじない「えっさかさへのぐるるんば」が気に入って、ごっこ遊びをする時もこの掛け声を掛けて変身していました。また5歳児のRくんは「冬だけじゃなくて他の時もお化けいるよね。だって春の次は夏が来るし、その次は秋が来るし・・・」などとお話ししていました。



「クリスマスの木」 何のお花も実もならないもみの木は、はじめ仲間の木にばかにされていました。けれども赤い服の不思議なおじいさんだけはもみの木を励ましてくれます。クリスマスの日、たくさんの子ども達がもみの木の回りに集まって来てくれたのです。

「もみの木、もみの木・・・」と歌いながら・・・行事や季節を扱った紙芝居はさほど市販されていません。身近な行事だけに、何か温かいエピソードをと考えて作りました。毎年クリスマス近くに子ども達に披露し、一緒に「もみの木」の合唱を楽しんでいます。どんな人にもひとりひとり大切な役目があって、かけがえのない存在だということをこのもみの木の最後の笑顔から感じてほしいと願っています。

これからも、病気や予防、健康についての紙芝居など子ども達と楽しみながら、心に残るメッセージを伝えられるお話作りをしていきたいと思っています。



**掲示板****近畿ブロック 病児保育学習交流会**

1969年に設立された枚方病児保育室と1973年設立の寝屋川つくし病気明け保育所が交流する中で「学習がしたい」との声があがり、1985年1月、参加団体4施設、参加者24名で第1回の近畿ブロック病児保育学習交流会が開催されました。

枚方・寝屋川の3つの病児保育所と「京都に病気明け保育所を作る会」の医師・看護婦・保母・調理員などの担当者と父母達関係者が集まって、運動の形態や保育内容について語り合いました。その後、枚方と寝屋川が持回りで近畿の病児保育関係者に声をかけ、年1回ということで、毎年続いている。参加者40~50名、参加団体は10施設前後で遠いところでは、大分や松江からの参加もありました。

内容は「病児保育ができるまで」「発熱と冬の病気について」「誰でもできる病児食」など参加者の要望の多い講演と、分科会の組み合わせで、参加者ひとりひとりが日頃の疑問や思いを発言し、運営や看護・保育について真剣に話し合います。第14回目を終え、報告集もできました。来年に向けての実行委員会が発足するころには、他の地域でもこのような動きができていくのでしょうか。

堀田和子

**「診療雑感」**

小野小児科医院 院長 小野 武巳

日常、小児科の診療にたずさわって感じることは、年々病気の季節感が無くなっていることです。まさか、疾患が果物のように温室で発症するわけでもありますまいが・・・。例えば「はしか」は春から初夏にかけて発症し、2~3年毎に流行する。「風疹」は冬から春の終わり頃に、「水痘」と「ムンプス」は冬から春に、「りんご病」は秋から冬に多いと言われていますが、昨今は、こうした伝染病は一年を通してみられるように感じられます。現時点では「ムンプス」と「水痘」が散見されます。また「乳児嘔吐下痢症」は本来冬の伝染病ですが、年中発症しています。

病気には(1)身体の病気と(2)こころの病気があります。我々第一線で診療している小児科医は、この身体の病気については比較的速やかに対処していくことが出来る力を培っているのですが、こころの病気については、時間的にも保険のうえでも、ややおろそかになっている現状は否めません。病児保育所では身体の病気の子どもを一時預かることが中心になってしまっているのですが、こころの病気の子どもをも預かるべく努力したいと考えております。

我々の病児保育所は開設して1年ですが、その間約450人を預かりました。その子ども達のなかでこころの病気の子どもは数えるほどしかありませんでした。いくつかの問題はあって、保育所側の熱意と家族の協力が望まれますが、この問題は後のものとしておきましょう。

保母と看護婦、それぞれの守備範囲を線引きしていた感は否めません。それではいけないのであって、専門分野の輪をドッキングさせ、連携しあい、勉強しあって、いわば「病児保育学」といった新しいジャンルの学問をするといった考え方はいかがでしょうか。

身体の病気については、「感染症発生動向調査情報」、い

わゆる感染症サーベランス(\*)で全国の疾患情報が得られますので、それを参考にして頂きたいと思います。家族が安心して預けられる、子どもが喜んで楽しく過ごせる、良き病児保育所を目指して、皆でがんばっていきましょう。

\*医療併設型の病児保育(小児科医院)・各地区的保健所・各県庁の保健予防・疾病対策係で、把握していると思います。

**必携****全国病児保育協議会編(帆足英一監修)  
病児保育マニュアル**

病児保育の従事している保母・看護婦必携の「病児保育マニュアル」が完成しました。是非、一人一冊手元においてご活用ください。

病児保育を展開していく上での「保育看護」の専門性をいかに高めればよいか、その具体的な内容が記述されています。

## ●協議会加盟施設の場合

実費 1,000円(送料実費)

## ●その他の場合

2,500円(送料込み)

## ●申し込みは全国病児保育協議会

事務局まで

